

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2021 年 3 月 1 日 発行
(通巻 488 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 85

- ・新しい劇場を再生したい (1)
- ・NPO 現代座 2020 年度活動報告 (2)
- ・2020 年度 活動計算書 (3)
- ・「われらいずこより来たる」(1959 年②全国巡演) (4-5)
- ・『リアル』で対抗していくべき時 蔦谷栄一 (6)
- ・希望舞台・玉井徳子著『気がつけば光の中を』の紹介 (7)
- ・お知らせ 会館日誌 会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

劇場と協同

新しい劇場を再生したい

木村 快

いつ果てるかもしれないコロナパンニックに明け暮れ、人の集まる〈劇場〉は不可能だ。じつと耐えるしかない。あらためて劇場のあり方について考えている。

◆協食で生き延びたホモサピエンス

現生人類、ホモサピエンスの誕生は 20 万年前と言われるが、当時、アフリカ大陸には他にも 20 前後の人類グループが存在していた。ホモサピエンスは中でもきわめて弱いグループだったが火山爆発による地殻変動で森林地帯がなくなり、サバンナ(草原)で暮らすようになった。

一般に霊長類の動物は自分で発見した食料をその場で食べるが、ホモサピエンスは徘徊する肉食獣に怯えながらの生活だったため、安全な場所に隠れ住み、屈強な大人が食料を探し歩いた。そして食料を手に入れるとそれを隠れ家に運び、高齢者や幼児といっしょに食べるようになった。他の人類は衰退していったが、この〈協食〉の習慣によってホモサピエンスは生き延びることができた。

◆協同がコトバを生み出した

人類がコトバを使うようになるのは 7 万年前と言われる。集団で暮らすと相互の気持ちを知ら合うことに苦労する。それが脳を拡大させ、肉声によるコトバを表現させた。コトバは体験の記憶である。体験を組み合わせることで新しい可能性を共有でき、新しい生き方をつくりだしていく。こうして協同行動が進化したのだと言う。人類の脳は〈協同脳〉、〈社会脳〉として進化したのである。

◆農耕の発展で不安な時代へ

長い狩猟採集民時代が続き、農耕時代を迎えるのは

1 万 2 千年前くらいだろう。食料の保存ができて、生活も安定するようになるが、物資の所有が始まり、貧富の差が拡大する。争いが増え、やがて支配者が生まれ、画一的支配によって、自発的な協同性は失われる。天候異変で作物が被害を受けると食糧危機に襲われる。

◆劇場の始まり

農耕生活の不安を克服するため、自然を支配する神に対して、食料の豊作、群れの安全を願う儀式が生まれる。儀式の日は集落全体が日常のいざこざから離れて、身分の差別なく共に歌い踊ることによって忘れていた協同体験をよみがえらせた。祭りの誕生であり、〈劇場〉の始まりである。

◆肉声を失った資本主義

だが資本主義の現代は世界中の自然を食い荒らし、所得格差を広げ、利潤追求に明け暮れている。さらにデジタル化と人工知能が未来をつくと叫んでいる。劇場は見世物小屋となり、肉声が見包する人の心を捨てさってしまう。人間の孤立化はさらにすすむだろう。

◆劇場を再生しよう

見た目の情報ではなく、生きた人間同士の肉声で、心の底に眠る協同への夢を呼び起こしたい。協同の土台である劇場の再生にとりかからなければならぬ。



★なんとしても肉声の劇場を守りつづけたい (現代座会館ホール)

NPO現代座

2020年度活動報告

◆『風は故郷へ』公演の延期

2020年度は久しぶりに大きな芝居をやるつと、『風は故郷へ』を9月に公演する予定で準備をしていました。ところが稽古を始めようとした3月からコロナウイルスの感染が広がり、集まって打ち合わせすることも出来なくなってしまう。何よりお客さんに集まってもえらないのでは意味がありません。公演は1年延期することになりました。

◆現代座会館の使用状況

本来なら現代座会館では色々な劇団やグループが稽古や公演、様々な集まりをしています。けれど、3月になると次々と電話が入り、稽古や公演は全てキャンセルになりました。

夏になってやっといつも稽古する劇団が使ってくれましたが、ホールでの稽古は4団体、3階小ホールでの稽古は2団体でした。

お客さんを入れての公演となると本当に大変で、ホールで公演したのは「劇団コゴロ」だけ、3階小ホールも「リトルコンサート」だけでした。

人々が集まって心を響かせ合う場所としての現代座は、コロナで集まらない中では、じっと耐えているしかありませんでした。

◆3カ教室

そんな中でも志野さんの3カ教室はずっと活動を続けてきました。1回の受講者を数人規模に縮小し、クラスを増やして、消毒と換気を徹底しながら、色々と工夫を凝らしてやっています。

◆誰でもできる朗読教室

「誰でもできる朗読教室」も開講を2ヶ月遅らせましたが無事終了し、無観客ではありませんでしたが発表会も行うことが出来ました。講師の長谷川葉月さんは武蔵野朗読会も主催しています。武蔵野朗読会のおさらい会も無観客で3階小ホールで行いました。

◆ふれあいサロン

地域のお年寄りの緑町ふれあいサロンは「高齢者は閉じこもっていると駄目なのよ。1人でも来たら対応しよう」とスタッフは頑張っています。

◆地下ホールの改修

2020年からはスタジオ・ポラーノを主催している八木澤賢さんが、事務所を現代座の1階に移し、ホールのスタッフと管理を受け持ってくれています。八木澤さんは現代座公演『武蔵野の歌が聞こえる』の出演者でもあり、普段は様々な劇団や催し物のスタッフの仕事をしています。八木澤さんはキャンセル続きでホールが空いているのをチャンスと考えて、もつと使いやすいホールにするための改修を始めました。

倉庫を整理して広く改築し、奈落の楽屋も全て取り壊し、西河大さん、木の下敬志さんと協力して、きれいな楽屋に作り直しました。

ホール専用の換気扇も取り替えました。

【財政問題】

◆公的支援

次ページの表は東京都に提出するNPO活動計算書です。公演収入はゼロですし、会館収入も140万円くらいでいつもの3分の1しかありません。NPO現代座は会館の維持費を家賃として(株)現代座に払っ

ていますが、今年度はついに払えませんでした。何とかしなくてはなりません。

しかし、持続化給付金200万円と小金井市からの応援金20万円をいただきました。換気扇の工事も中小企業振興公社のコロナ対策助成金で一部を補助してもらいました。

◆皆様に支えられて

そして何よりも皆様からの会費とたくさんのご寄付をいただきました。大変だろうからと多額の寄付をくださる方もいて、本当に励まされました。ありがとうございました。

【2021年度の活動】

2021年度もコロナの中でのスタートになります。が、頂いた寄付金を活用して何とか『風は故郷へ』の公演を実現したいと思っています。現在のところ8月21日から29日の間で公演の予定です。

◆現代座の在り方を考える会

昨年からワーカーズコープ(労働者協同組合)の皆さんとついに「これからの現代座のあり方を考える」会議を開いています。

現在までの討議では『人間の原点を考え、人間の活力がうまれ、協同をつくる「モン」(社会的共有財産)としての現代座』を創ってということとで話し合います。

具体的な事はこれからですが、まずは「劇場と協同の多摩研究会」を立ち上げることに、呼びかけを始めています。

新しい活動の可能性をさがしていきたいと思えます。

(木下美智子)

2020年度 活動計算書

2020年3月1日から 2021年2月28日まで

特定非営利活動法人 NPO現代座

(単位:円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取会費		1,395,000
2 受取寄付金		1,594,000
3 受取助成金等		
公共団体補助金	2,562,000	
民間助成金	0	2,562,000
4 事業収益		
①地域劇場づくり支援事業収益	1,423,725	
②制作上演事業収益	0	
③セミナー事業収益	363,000	
④国際協力事業収益	0	
⑤まちづくり事業収益	0	
⑥子ども健全育成事業収益	0	
⑦会報発行事業収益	0	1,786,725
5 その他収益		
受取利息	7	
雑収益	103,581	103,588
経常収益 計		7,441,313
II 経常費用		
1 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	802,000	
(2) その他経費		
制作・準備費	0	
創造・上演費	0	
交通・通信費	0	
資料・印刷費	10,479	
消耗品費	1,436,369	
会報・HP経費	581,743	
その他経費 計	2,028,591	
事業費 計		2,830,591
2 管理費		
(1) 人件費		
給料手当	640,950	
(2) その他経費		
通信運搬費	199,089	
消耗品費	248,501	
OA経費	498,156	
雑費	174,426	
光熱水道費	748,212	
租税公課	70,000	
家賃	0	
その他経費 計	1,938,384	
管理費 計		2,579,334
経常費用 計		5,409,925
当期正味財産増減額		2,031,388
前期繰越正味財産額		563,630
次期繰越正味財産額		2,595,018

当期において、その他事業は実施していません。

木村ノート◆われらいずこより来たる 第2部◆
1959年② 全国巡演という仕事
木村 快

前回までの記述

★レポート81号 新劇運動の分裂

戦後、反戦思想の故に解散させられた新協劇団は戦後復活するが、まもなく左翼運動はソ連支持派と中国支持派で対立、1950年、新協劇団も分裂。中間派は近代劇グループ「ヴェリテ・せるくる」を設立。その中の最若手女優が真山美保だった。

★レポート82号

真山は紡績工場の女子労働者によって劇場の魅力を教えられる。演劇観の違いからヴェリテ・せるくるは半年で解散。真山美保は草村公宣、榎村浩吉と3人で新制作座としてスタート。

★レポート83号 庶民の新劇をめざして

真山美保は『民話劇・泥かぶら』を書いて上演、芸術祭最優秀賞を獲得、さらに『馬五郎一座顛末記』を書き、識者の注目を浴びる。当時、新しい民衆演劇の研究者として知られていた哲学教授・福田定良によって広く紹介され、革新的文化人たちの支援を受け、労働者・庶民を対象とした演劇上演を目指すようになる。

★レポート84号 1959年① 不思議な学校

中堅幹部育成のため、福田教授の呼びかけによって、協賛する十数人の大学教授によって、「演劇」ではなく、時代を読むための本格的な「哲学・思想史」の特別研究所が開設された。何も知らずに引き込まれたばかりにとって、それは実に不思議な学校だった。

◆全国巡演班に

2月から7月にかけての特別研究所が終わり、8月からは20名のうち16名が劇団研究生となり、実際の公演活動を学ぶため、高校公演向けの『青春』班に6名、地域公演を展開する『馬五郎一座てんまつ記』班に10名が配属された。ぼくが組み込まれた馬五郎班は大先輩中心の総勢45名におよぶ大世帯だった。

春に真山美保が全国巡演の功績で菊池寛賞を受賞し、支援文化人・学者グループが特別研究所を開設したことが併せて話題になっていたから、後半期からの全国公演への期待も高まっていたようだ。

★『市川馬五郎一座てんまつ記』の内容



旅廻りの市川馬五郎一座は興行師に見放され、解散の一步手前で炭鉱町に乗り込む。座員の必死の呼び込みで小屋は久々に満員となったが、幕を開けたとたん、炭鉱町はストライキに入り、そのどさくさで興行師に売上げの金も持ち逃げされてしまった。

分たたちが準備した劇を一緒にやってくれないかと提案する。組合員たちの温情に感激した一座は慣れない台詞を大声で叫びながら、時代劇もどきの大立ち回りで熱演し、観客から大喝采を受ける。

古い義理人情の世界に生きて来た一座は、新しい時代の観客の心を実感する。一座の者は炭鉱員たちの心のこもった見送りを受け、興行師の手を離れて、自分たちだけの新しい劇場をもとめて旅立ってゆく。

★この作品は1954年度芸術祭で上演され、進歩思想の表現に熱中していた新劇に比べ、古い時代に生きる旅役者と新しい時代の労働者を突き混ぜ、働く者の心に流れる共通した心情を描いた異色の作品として注目を集めた。1955年、山本薩夫監督によって『浮草日記』のタイトルで映画化され、第29回キネマ旬報ベストテン第9位、第10回毎日映画コンクール脚本賞を受賞している。撮影には常磐炭鉱労働組合が協力したこともあって、炭鉱労働者の間でも上演が待ち望まれていた。

★北海道の炭鉱公演

『馬五郎一座てんまつ記』は8月から翌年1月までの6ヶ月、関東、北海道、東北の94市町で公演をしているが、中心はなんとと言っても北海道で、45日間に27市町を巡り、そのうち炭鉱町は19カ所36公演行っている。

人も芝居道具も列車の移動だから大変だった。上野駅から青森行きの列車に乗り、早朝に青森へ着くと連絡船で函館へ。又列車に乗り札幌で乗り換え、夕張市に着いたのは夕刻、まる二日がかりの移動だった。

そこへ大勢の労働組合員がやってきて、集会の準備があるので立ち退いてほしいと言う。食べるものもなくなった一座はストに入った組合員に「お前たちはそれでも人間か!」と対立するが、事情を知った組合員は自分たちの弁当を提供し、よかったら決起集会で自

★炭鉱町の特徴

炭鉱は市街地から離れた山間部にあるのが普通で、独特の雰囲気を持っている。炭住と呼ばれる長屋が密集し、すぐそばに採炭現場へ向かう坑口、選炭場、ズリ山、小学校、集会場、マーケットがある職住一体の地域である。戦後は軍隊からの復員者や海外からの引き揚げ者が多く、一般の市街地とは違った運命共同体的な雰囲気があった。山あいトラックで移動していると、突然石炭の巻き上げ機（やくら）がそびえ建ち、何千何万の人の暮らす街が出現する。

炭鉱は三交代勤務だから公演もそれに合わせて幕をあけなければならぬ。朝8時に一番方とよばれる人たちが入坑すると、いれかわりに前夜から働いていた三番方があがってくる。その三番方の人たちがひと風呂浴びた10時頃幕をあけると、午後4時に入坑する二番方の人といっしょに観劇できる。そして一番方の人があがってきてひと風呂浴びた午後の6時にもう一度幕をあけると、今度は家族たちもいっしょに観劇できるといふ寸法だ。

しかし朝の10時に幕をあけるとなると、ぼくたちスナップ（裏方）は荷物の運びこみ、舞台設営の時間が必要なため、朝5時に起きなければならぬ。中心の俳優10人前後は体調を整えるため別行動だが、3時間以上もかかる芝居だったから、終わると午後2時半。

それからひと息つく間もなく6時からの舞台の準備。幕が開き、幕が閉まるのが夜の10時。それからセットや器材を解体してトラックに積みこむと12時すぎ。旅館へ帰って食事をし、風呂に入ると寝るのは夜中の2時である。朝は5時に起きてまた次の公演地の朝公演にかかる。これが一週間のうち4日、5日とつづく。

はじめての仕事だからどうしても先輩たちの足手まといになり、終日怒鳴られようだった。あらかじめ想像はしていたが、それにしても何とすさまじい生活だろうと度肝を抜かれた。ぼくは少年時代から肉体労働に従事してきたから少々のことには驚かないつもりだったが、まさか芝居の裏方がこれほどの重労働を強いられるというとは思ってもみないことだった。

こうした炭鉱での公演は特殊な例だが、一般の公演でも次の公演地への移動、貨車から道具類を降ろして会場へ運び、舞台設営、上演、舞台の解体、荷物の積みこみ等々、一日平均16時間は常識だった。働いていないときは眠っている時だけという生活。それでもなんとか一ヶ月もたつと仕事になれてきた。

★時代はエネルギー政策の転換期

戦後の復興を支えた石炭産業は当時衰退期に向かっていた。炭鉱の閉山が始まり、九州の三井三池炭鉱では生産縮小のための指名解雇が行われ、反対闘争が展開されていた。三井は大量解雇の対策としてブラジルへの移民の準備まで始めていた。当然、石炭産業の労働者たちの間では緊張が高まっていた。

11月後半、三井芦別炭鉱に乗り込んだ時、三池に連帯する抗議集会があり、新制作座もこれに参加。労働者と肩を組んで労働歌をうたいデモ行進した。



ぼくにとつては生まれて初めての体験で、今、日本は大変な時代に向かっていることを知った。しかし「俺も戦う仲間なんだ」という不思議な感動があった。そんな時期だから、公演が始まると客席から「そうだ！やれ！」などと声が飛び、客席は沸き返った。今振り返ると、10月から11月にかけて北海道中の炭鉱町を公演して回ったことは、日本人として大変貴重な体験だったと思う。

★「終戦二年目の顔」と呼ばれて

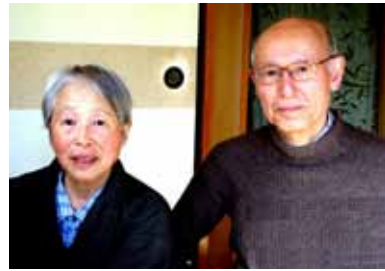
自分なりにはいろいろ発見があり楽しかったが、肝心な劇団の仲間たちとはなかなかなじめなかった。相変わらず友達もできず、移動の車中でもぼくはひとりぼつんとしていた。自分では気にしていなかったが、はた目にはかたくなに孤立を守っているように見えたのだろう。先輩からは「もっと積極的に仲間の中に入るように」と忠告された。しかし、せめて移動の車中でくらいひとりであったというのが本音だった。

ぼくがみんなになじめないことは、みんなの側からも相当違和感があったのだろう。公演のない日に会議が開かれると、よくぼくの態度が問題にされ、集中的に批判を浴びた。そんなぼくを演出家の真山美保は「日本の苦悩を一身に背負っているような顔をしているね」と言い、「終戦二年目くらいの日本人の顔よ」とも言われた。おかげで、ぼくは自分の間「終戦二年目」というアダ名で呼ばれることになった。

この調子だと、おそらく劇団には採用されないだろうと覚悟していたら、その年の暮れに正式採用者の発表があって、ぼくも採用されることになった。

『リアル』で対抗していくべき時

髙谷栄一



髙谷さんは「農的社会的デザイン研究所」の代表であり、「武蔵野の歌が聞こえる」上演を通じて設立された「川崎平右衛門研究会」事務局長を担っております。

日本人の農業と協同のあり方についての提言者として知られる方で、農的社会的について数々の著作を発表しております。

また教育者出身の奥様政子さんと共に、山梨県に子どもたちとの農業体験塾「農土香（のどか）農園」を開設しております。

いつもお世話になっているのに、仕事を離れてゆっくりお話しする機会がなく、やっぱりお正月ついでいいなあと思いました。（木下美智子）

先の2月11日、家内と二人ということでは久しぶりに現代座を訪問し、木村快さん、木下美智子さんご夫妻と懇談させていただいた。ご夫妻が東京に戻って落ち着かれてからも、コロナの影響とともに、家内が孫の世話で時間がままならず、正月も大きく過ぎてこの日になったものである。そこでの話の中心は孫の話から当然のようにコロナの話となった。そのエッセンスを記録代わりに寄稿させていただく次第。

◆人の心を失うバーチャル時代

仕事、暮らしの領域でコロナの影響を受けて大きく変化したことは多いが、最も大きな変化を象徴的に言えばバーチャル化ということになる、というのが四人の一致したところだ。そのあらましなりポイントは次のようなことであった。

まず会議や集会の類はすっかりZOOMによるTV会議に置き換えられてしまい、顔を合わせて場面を共有しながら協議することが急減してしまった。まだ顔を知った者どうしが、こうした状況下、やむを得ず、次善の策とTV会議をやっているうちはまだしも、これが本来化して、画面を通じて知る相手が相手のすべでだと思ってしまうようになったのが恐ろしい。会議はますます機能的に進行するようになり、結論を出すことだけを目的とする場に陥ることになるのではないかと。一同が顔を合わせることで人を知り、場を知り、場面・雰囲気と共有すること自体に大きな意味・価値があるのであって、これがすっかりできていけば極端な話、結論がどちらに転んでも大差はなく、さして問題もなからう。

◆データを食って生きる幻の時代

そしてコロナにもなう働き方改革、在宅勤務の増加によって、ネットをつうじての管理徹底が凄まじい。在宅勤務に変わることによって何となく通勤時間は減少し仕事の軽減がはかられ効率化した、と受け止められがちである。業種や個別の事情によっても、実態は仕事時間は実質増加し、自宅での仕事場確保が困難な人も少なくなく、仕事環境は悪化し、一方では相対しての管理は減少して、数字だけによる管理が徹底されつつある。まさに人間のデータへの従属化が進行していると言わざるを得ない。

さらにこうしたZOOMによる会議、在宅勤務、ネットによる管理等が相まってGAFAM（Google、Amazon、Facebook、Apple、Microsoft）による寡占化を招き、もはや多国籍企業という以上に巨大企業は国家を超えたコントロール能力を有するに至っている。同時にITに関連する業

界、中でも経営層が高額の所得を集中して獲得するようになり、所得格差の拡大は著しい。そもそも物的価値を何も生み出すわけではない情報産業が所得を独占し、物を生産する農業や労働者層への富の分配はきわめて薄い。

◆私たちはどこへ向かっていたのか

われわれは時代の経過とともに、多少のアップダウンはありながらも、世界は豊かさを増していき、と考えるべきだ。すなわち未来に希望を抱いてきた。ところが文明が発展し、GDP増加を自己目的化した成長神話が肥大化し、さらにコロナによってバーチャル化が加速するほかに、われわれはより貧しくなり希望を失いつつあるのではないかと。

今、私たちが希望を取り戻していくためには、バーチャル化する流れの中で「リアル」にこだわり、リアルな活動の場を増やしていくことが肝心なところだ。

◆観客3人でも劇場を、協同を考える快塾を

そこであなただ、私はどうするのか。とりあえず木下さんは、三人劇場（三人集まれば語り芝居だ）でできるへの取組み、私と家内は新・快塾（これまで不定期で快塾を開催してきたが、メンバーが忙しいこともあって回数なり時間が限られることから、これとは別のメンバーによる定期的な集まり）を開催。

そして快さんにはこうしたバーチャル化の流れを笑い、リアルに目を向けさせるような演劇を作ってもらいたい、というのが三人の意向。果たして、快さんはこれからどのような作品に取り組んでいくのか・・・。自分ができるところで実行を積み上げていくしかない、というのが当日の結論。積小為大。とにかくできることをやってみよう、ということでお開きとなった。

『気がつけば光の中を』 劇場へのメモリアル

由井 数 希望舞台代表

玉井徳子
たまいのりこ

劇団希望舞台の玉井徳子さんが『気がつけば光の中を』という本を出版しました。制作部員として55年間、日本中で劇場を創り続けてきた中で、たくさんの出合いを綴った本です。本の紹介と玉井さんについて、由井さんから寄稿していただきました。

希望舞台は1985年に統一劇場から独立して創立され、1997年から水上勉作「釈迦内枢唄」の公演を続けています。2012年からは現代座会館に事務所を置き、現代座と協力し合っ



2021年3月5日
同時代社より刊行
定価【本体 1400円+税】

由井 数
ゆい つもる

門をたたいた。対応してくれたのは原爆下の広島公演中に全員亡くなった「桜隊」のただひとり生き残った名優、榎村浩吉氏だった。

演劇の仕事は想像をはるかに超えて、厳しくきつかつ

国を分けるような「六〇年

安保闘争」が沈静化された頃、

私は学生寮を出て上京し、わずかな縁を頼りに新制作座の

門をたたいた。対応してくれたのは原爆下の広島公演中に全員亡くなった「桜隊」のただひとり生き残った名優、榎村浩吉氏だった。

演劇の仕事は想像をはるかに超えて、厳しくきつかつ

た。当時、演劇を上演できるホールなど都市の一部にしかなかった。昼夜二回、学校の体育館や公民館が毎日連続する。夕張の炭鉱では一番方、二番方、三番方の労働者と地域の家族を含め、午前十時と午後六時開幕という変則的な二回公演だった。早朝から舞台の設営、本番、終演後すかさず片付け、すべての荷物を一台のトラックに収めて、次の公演地に向かうのである。出演者も裏方（スタッフ）も全員で走り廻っている印象だった。

一年が過ぎて仕事も手馴れた頃、信州の田舎町の公演先に新人が配属されて来た。いかにも都会育ちで細くて小柄な少女に見えた。無理しているのかハイテンションで走り廻っている。スタッフが重たいセットを肩がけに早足で運んでいると「手伝いまーす！」とその新人が駆け寄ってくる。「邪魔だからどけ！」と怒鳴ると「エキスキューズミー」。五八年前の玉井徳子さんとの出遣いである。

新制作座には何を指して来たのか分からない変な若者が少なからずいた。私もその一人であったが。

「民衆の中で民衆と共に民衆の演劇をつくる」は当時の劇団の旗印だった。真山美保の著書「日本中が私の劇場」は多くの若者の心を捉えた。その理念は統一劇場、希望舞台へと引き継がれていったと思う。

彼女は制作部に配属されたが、制作部員は知り合いなど誰もいない町に一人で出かけて行き、公演の主権を引き受けてくれる人を探すのである。お金にもならない赤字のリスクを負うかもしれない仕事に手を貸す人などいないのが普通だが、彼女は「お金にならないからこそ、そこに共通の価値を見出してくれる人は必

ずいる、巡り合わないだけだ」と言う。その一人と出会う五五年の旅人生は、出合った人たちから受け取った創造者の心の五五年だ。今、頭は白くなっているが、エクスキューズミー」の頃と心根は変わらない。

どんなに優れた俳優や脚本、演出家でも、毎日客席に座る何百人かの人生の嘆きを越えることは出来ない。その何百の心が開き舞台を受け入れてくれた時、初めて役者は輝き、劇場空間は大きなハーモニーとなる。生きた人間の心から心へ伝わり、影響し合う生きた劇場はそこに居合わせた人々の心を開き、哀しみを浄化してくれる。それはいつも一人から始まる。そしてその出合いは劇場の共鳴を創る土台となる。舞台に立つ生身の役者たちの計算を超えた魅力を引き出してくれる。私たちは「出合いは創造の始まり」と言ってきた。

現在、コロナ禍は人間社会の不条理につけ込んで住処にしようとしている。このウィルスは自らの死を恐れない。残った者が何倍にも変種し再生、繁殖する能力をもっている。人間は逆である。一人の生命といえども守り育てることを使命にしている。「一人は万民のために、万民は一人のために」はお題目ではない、どの時代にあっても貫かねばならない人類が築いた「人間の掟」だと思っている。

マスクや互いに距離を置き密を避けるのは当面の対処としてやむを得ないが、人間は太古の昔から共通の願いや思いを祈りやリズムなどで表現し、繋がりがあい、社会生活を送ってきた。この何万年もかけて引き継がれてきた人間の営みを簡単に失くすことは出来ない。

今あらためて、自分の仕事の原点に立ち返り、考えてみたいと思った。

現代座会館での公演のお知らせ

リトルコンサート

前回の「現代座レポート」で紹介した
「リトルコンサート」が4月に開催されます

日時：2021年4月4日 日曜日 13時30分開演

場所：現代座3階小ホール

コンサートの同時配信もします。ネット配信のアドレス
は【<https://youtu.be/Z9-JDVOJIhs>】
配信の視聴料は無料です。よろしかったら投げ銭をお願いします。投げ銭サイトは以下のサイトです。

【<https://voce-m.nug-get.jp>】

リトルコンサートを主催している津田さんは「ぐるうぷ
絵夢」として活動しています。

ぐるうぷ絵夢イベント記録（リトルコ
ンサート、Classic Live などの公演を中
心に動画、音楽を載せています。）

【<http://www.voce.gr.jp/?cat=7>】



「演劇仲間ことのみ」公演

題目『こころ』夏目漱石 作
桑原睦 上演台本 演出

公演日時：5月13日（木） 19時
14日（金） 14時 19時
15日（土） 14時 19時
16日（日） 14時

会場：現代座ホール

料金：3000円

予約：問合せ 演劇仲間ことのみ

080-3724-3706

kotonomi335@icloud.com

日本を代表する作曲家「湯山昭」作品
集（ぐるうぷ絵夢が主催、お手伝いをし
た、動画、音源と合わせて紹介をしてい
ます。【<http://voce.gr.jp/yuyama/>】



現代座会館 12月～2月 活動日誌

12月7日 第2回現代座タスクフォース会議

17、18日 「現代座レポート84号」発送作業

21日 協同総研相良氏とタスクフォース

打ち合わせ

1月15日 山本担さん来訪

21日 「川崎平右衛門研究会」事務局会議

25日 津田夫妻（リトルコンサート）来訪

2月4日 協同総研相良氏とタスクフォース

打ち合わせ

11日 蔦谷栄一、政子夫妻来訪

19日 第3回現代座タスクフォース会議

21日 緑町第2町会役員会

26日 「協同の発見」誌座談会に木下参加

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

使用無し 照明設備と楽屋改修作業

【三階小ホール】

12月9日 武蔵野朗読会「年忘れ朗読おさらい会」

13日 現代座「風は故郷へ」稽古

1月9日 NPO現代座会議

10日 現代座「風は故郷へ」稽古

31日 スタジオポラーノ稽古

隔水曜・木曜日 朗読教室

隔火曜・木曜日 ヨガ教室

【定期使用 二階サロン】

毎水曜日 熟年パソコンサークル（12月のみ）

隔木曜日 ぽろ熟年講座（12月のみ）

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円

協賛会員 10,000円（1口以上）

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座